

ターミナル

2005(平成17)年5月14日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督＝スティーヴン・スピルバーグ／出演＝トム・ハンクス／キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ／スタンリー・トゥッチ／チー・マクブライド／ディエゴ・ルナ／クマール・パラーナ／ゾーイ・サルダナ (UIP 配給／2004年アメリカ映画／129分)

……遅ればせながら『ターミナル』を観た。ニューヨークの JFK 国際空港に着いた途端に、祖国クラコウジアのクーデターのため入国拒否。主人公ビクター・ナボルスキーは入国も帰国もできないまま、空港のターミナルで「待つ」だけの生活に……。こんな極端な状況設定が自由にできるから映画は面白い。そしてビクターが会えるのは敵だけではなく、多くの友人たちや美しいフライト・アテンダント。人生の縮図を見事に描いた作品だが、ちょっと作りすぎの感も……。そういえば私もソウルで1度、大連で1度、空港のターミナルで、1人で緊張した体験あり……？

入国審査あれこれ

外国への入国審査をめぐるのは、そのチェックの甘さ、厳しさも含めて国によってさまざまなやり方が……。したがって、そこからさまざまな「ドラマ」が生まれるが、その多くは犯罪のチェックとその危険に伴う入国拒否問題。入国審査については「人情論」は通用せず画一的な処理が基本だが、それでもパスポート審査員や入国審査官のパーソナリティによって多少の幅は当然あるはず。ちなみに、私が中国・大連の周水子国際空港で降りた時は、入国審査がないまま、ノーチェックでオーケー。

つまり迎えに来てくれた留学生の兄さんたちの力によって「VIP 待遇」とされ、入国審査なしでオーケーとなったわけだ。もちろん後にも先にもこんな体験はこの1回だけ。

2003年1月に観光立国宣言をした日本は、外国人観光客を大量に受け入れるべくさまざまな施策を講じているが、それはそれ。私が弁護士として現実に処理している入国審査に絡む事件はさまざま。偽造パスポート事件はさすがに経験したことがないが、オーバーステイ（滞在期限徒過）や偽装結婚の事件などはザラ。東京・新宿の歌舞伎町で中国人を中心に大量に発生している犯罪や大阪に多い蛇頭による違法入国事件等を見ても、入国審査を厳格にやる必要性があることは当然。

外国の空港へ1人降りる時の気持は？

何回も外国旅行を経験している人でも、1人で飛行機に乗り、1人で外国の空港に着いて1人で入国審査をした人はそんなに多くはないはず。青春時代に1人外国旅行を体験した人はそんな経験はザラだろうが、外国ツアー旅行一辺倒(?)の多くの日本人は、1人で入国審査を受ける時の緊張感や1人で空港から外国に出る時の緊張感は知らないはず……？ でも私は、その体験が2度ある。それは……？

私の体験 その1

第1は、1995年9月、韓国のソウルの金浦空港。もともとは総勢4人でのゴルフ中心の観光旅行だったが、私は何とこの時、期限切れの昔のパスポートを持って関西国際空港に向かっていたことに空港に向かう車の中で気づき、急きょ事務所の事務員の自宅に連絡。

「申し訳ないが」と断ったうえ、事務所に行って私の新しいパスポートを持ってタクシーで空港に来てくれと頼みこんだ。そんなムリを聞いてもらったものの結局は予定していた飛行機に間に合わなかったため、やむをえず3人は予定の便に乗り、私は急きょ1人で別の便に乗ることに。「あなたまかせ」だったはずのゴルフ旅行は、突然、「自己責任」によるソウルへのそしてホテルに着くまでの1人旅行になってしまった。

何とか金浦空港に到着し入国審査を終えた私は、タクシーに乗るよりはリムジンバスの方が「安全」と考えてリムジンバスに。そして何とか……？

私の体験 その2

第2は、結果的には何も問題はなかったものの、2000年8月10日、たった1人ではじめて中国の大連へ旅立った時のこと。周水子国際空港に迎えに来てくれているはずの人間は、数カ月前に日本ではじめて知り合った留学生。夏休みで故郷の大連に帰ったため、そのチャンスに合わせて私の大連旅行の案内をかってくれたわけだが、果たして約束どおり大連の周水子国際空港に迎えに来てくれているのか？ もちろん信用していたが、万一迎えに来てくれなかったり、何らかの手違いで出会うことができなかつたら……？ ただ1人周水子国際空港で一体オレはどうなるのだろうか？

結果オーライとなったからそれ以上悩むことはなかったが、この映画を観ていると、「あの時」の、「あの気持」が鮮やかに私の記憶に蘇ってくる……？ あの時、ソウルでも大連でも何事もなくてよかった。そして私の祖国である日本も平穏でよかった……？

トム・ハンクスの役柄は……？

この映画でのトム・ハンクスの役は、英語（米語）もロクにしゃべれない東ヨーロッパの国のクラコウジアから、「ある目的」をもって、ニューヨークのJFK国際空港に降り立ったビクター・ナボルスキー。彼が入国審査でひっかかった理由は……？

パスポートについて説明を求める係員に対してビクターがまともに対応できないのは仕方のないこと。そんなビクターがクラコウジア人であることが判明したから、さあ大変。今、ちょうどクラコウジア国では軍事クーデターが起こり、大統領らは監禁され、国家そのものの存立が危うくなっていたのだから。そんな中、アメリカ合衆国はこのクラコウジア国を国家として承認することができなくなったため、クラコウジア国からアメリカへの入国は不可とされたわけだ。ガラス1枚、ドア1枚を隔てた向こう側はアメリカ合衆国の土地だが、事実上「無国籍人」となったビクターがそれを越えることは法的に不可能。さあ、大変な事態になったものだ……。

こんなちょっと変わった役柄をトム・ハンクスが熱演(?)しているが、ちょっと演技過剰の感じも……?

ビクターと対決するフランクは?

JFK 国際空港の国境警備局主任がフランク・ディクソン (スタンリー・トゥッチ)。17年間の勤務を経て近々警備局長に昇進する予定だが、国境警備局の仕事は、飛行機からの大量の入国者を決められたとおりの手続でテキパキとさばっていくこと。そこにはもちろん知恵や工夫も必要だが、それ以上に大切なことは統一されたマニュアルによる全職員の一致した組織的な対応と処理。したがって国境警備局の幹部たる者は、それを鼓舞・激励し、チェックしていくことが最大の仕事となるわけだ。

そういう仕事を17年間もやり続け、今やトップに昇りつめようとしているフランクは、その能力はもちろん、官僚性が最大の特徴。しかしそれは決して悪いことではない……。そんなフランクは、事態を説明してもよく飲み込めていないビクターにいつまでも空港ターミナル内に「滞在」されたのではかなわない。さてそこで、早くビクターを空港ターミナルから追い出すためにフランクが考え出した方策とは……?

魅力的なウォーレンはなぜ独身……?

この映画の第1のポイントはビクターとフランクとの「対決」だが、第2のポイントはビクターが運命的に出会う女性、フライト・アテンダントのアメリカ・ウォーレン (キャサリン・ゼタ=ジョーンズ)。スチュワーデスは昔から女性の憧れの職業の1つだったが、最近その人気は低下してきたのは、過剰な肉体労働のせい……? また、その呼び方も時代とともにコロコロと変わり、このパンフレットでは、アメリカは「ファースト・クラス担当のフライト・アテンダント」とある。紺色の制服をキリリと着こなし、キャリーバッグを引きながらさっそうと歩くアメリカ、いやキャサリン・ゼタ=ジョーンズの姿はそりゃカッコいいもの。アカデミー賞最優秀助演女優賞を獲得した『シカゴ』(02年)でのキャサリン・ゼタ=ジョーンズは色気タップリの魅力だったが、この『ターミナル』では

それとは全く違うキャサリン・ゼタ＝ジョーンズの魅力がたっぷり。18歳の時から航空会社に勤務し、20年間も世界中を飛び回っているアメリカは自称33歳だが、実際は……？ そして彼氏は……？ なぜ、こんな魅力的なアメリカが今でも独身なの……？

ビクターの友人はみんないい人ばかり

この映画には、ターミナル生活(?)を続けるビクターの周りに集まってくる友人たちが数名登場するが、それはちょっとヘンな奴(?)ばかり。紹介すればそれは、①ターミナルの清掃員のグプタ(クマール・パラーナ)、②20年間空港に勤めている荷物運搬人のジョー・マルロイ(チー・マクブライド)、③フード・サービス勤務のエンリケ・クルズ(ディエゴ・ルナ)ら。このエンリケは、入国係官の女性ドロレス・トーレス(ゾーイ・サルダナ)にホレており、ビクターに対して食事を提供するかわりに「恋のメッセンジャー」を引き受けさせることによって、2人は次第にお友達に……。

彼女は、毎日性懲りもなくエリンケの話題をもち出しつつ、「入国許可」のスタンプを取りにくるビクターにあきれながらも、その都度「入国拒否」のスタンプを……。

またグプタなどは、当初ビクターをCIAのスパイではないかと考えるほど用心していたが、「ある事件」をきっかけにビクターは職員らのヒーローに……。これらの空港職員たちとビクターの交流は、ここに書いてしまってもミもフタもないので映画を観てのお楽しみに……。

こういう心暖まるストーリーのつくり方は、スピルバーグ監督独特の感性によるものか……？

ファンタジーみたいな恋愛のスタートだが……？

もちろんビクターとアメリカの出会いは全くの偶然。2回目に2人が出会った時も、アメリカは以前にビクターと出会ったことを覚えていないほど偶然の出会いだった。そのうえアメリカには彼氏(?)がおり、その彼氏からの連絡をずっと待ち続けていた。さらにそんなアメリカの性格は、「ナポレオンと同じで悪い

癖があるの。毒になる男を次から次へ食べてしまう」というちょっと恐い女……？ さらに、アメリカは美人だから若く見えるものの、彼女自身の「告白」によれば、実はアッと驚く39歳とのこと。

他方、ビクターは中年男。彼がニューヨークにやってきた目的や「ジャズ」と称する缶を大切に抱えている意味は、映画の後半から少しずつ明らかになるが、中年男ビクターの身元は不明……？ 彼には祖国クラコウジアに妻子がいても当然だろう。ところがこんな2人がいつしか恋愛状態(?)に……。もともと、そこまでとり着くにはビクターの涙ぐましい努力があったが、それは映画を観てのお楽しみ……？

ところが、祖国クラコウジアのクーデターがやっと収まり、みんなから祝福を受けるビクターに対してアメリカがとった行動は……？

悪人が一人もないファンタジー

俳句をめぐる高校生の熱き戦いをテーマとし、松山を舞台につくられた映画が『恋は五・七・五!』(04年)。これは『“五・七・五”のバトル 俳句甲子園』(愛媛新聞社・2004年)を原作とした映画で、現実の物語。そして言うまでもなく、私の出身地の松山は正岡子規で有名な俳句の国……？

ところで、この映画には悪人が1人も登場しない。フランクは官僚的だが、それは職務に忠実だけで職務上備わった本性として仕方ないもの。そして悪役として位置づけられているが決して悪人ではない。またビクターの友人となる職員たちも前述のとおり、みんないい人ばかり。毎日あきれながら「入国拒否」のスタンプを押し続けていたドロレスなどは、遂にはエンリケのプロポーズに負けてハッピーエンドに……。

要するに、この映画の登場人物たちはみんないい人ばかりで、悪人は1人もいない。そこで、この映画を観た後、「俳人」(?) 坂和章平も一句ひねってみた……？ それは、「悪人が一人もない ファンタジー」というもの。さてその出来のほどは……？

2005(平成17)年5月16日記